兵庫県知事選挙に取り組んで

石川　康宏（神戸女学院大学名誉教授）

9月30日に自民や維新も含む兵庫県議会の全会一致で失職に追い込まれた斎藤元彦知事が、迷惑系ユーチューバー立花孝志氏の支援も大きな追い風として11月17日に再選されました。わずか1か月半の間に、斎藤氏の失職を歓迎した世論が大逆転をしたわけです。私はこの選挙に「憲法が輝く兵庫県政をつくる会」の代表幹事として、また選挙本部長として取り組みました。以下、その体験も元にいくつかの事実と検討すべき論点の提起を行います。

1　3候補に分かれて対立した自民党の衰退

今回の選挙は異例づくめのものでした。その1つは県政与党の自民党が独自候補を立てられず、公然と3つの陣営に分かれて闘ったということです。

これには前段がありました。前回2021年の選挙で自民党兵庫県連は井戸前知事の後継者と目された前副知事の金沢氏を推薦しましたが、自民党本部の指示によって推薦者を斎藤氏に切り換えています。その結果この選挙は自民議員等が二つの陣営に分かれて闘う「自民分裂選挙」となりました。この時、県連の決定を覆すのに大きな役割を果たしたのは「安倍派5人衆」の1人衆院議員の西村康稔氏で、この対立は〝兵庫派自民VS官邸派自民〟とも評されました。

斎藤氏の初当選以後、2つの会派に分裂していた自民党は形の上では1つにまとまります。しかし、2024年、ある県庁職員の内部告発に斎藤知事が報復的な対応をしたことから始まる県政の大混乱の中で、自民党は再び対立を表面化させます。斎藤知事の「不信任」に同意する一方で独自候補の擁立ではまとまるこ

とができず、一度は自主投票を決定しました。しかし、ここでも西村氏が県連の動きに抵抗し、独自候補の擁立に向けて元経産省官僚を県議団に引き合わせます。ですが県議団はこれに同意せず、県連は再び自主投票を決定したのでした。

この後、西村氏はつながりの深い明石市議等とともに斎藤氏の支援に向かいます。他方で、少なくない県議が元尼崎市長の稲村和美氏の支援を、県内最大の15名からなる神戸市議団が直前まで維新の参議院議員だった清水貴之氏を支援するという具合に、自民党は3つの陣営に分かれることになりました。もはや政党としての統一性が保てなくなってきているこの状況は、旧安倍派を中心とした「官邸一強」の瓦解を背景とする自民党全体の新たな衰退と連動しているように思えます。

2 維新・国民・れいわ支持層の半数以上が

今回の選挙結果は、斎藤氏111万票、稲村氏98万票、清水氏26万票、私たちの「会」が擁立し共産が推薦した大澤氏7万票、立花氏2万票、福本氏1万票、木島氏1万票となりました。事前の予想でもっとも有力とされた稲村氏は、もともと立憲等でつくる「ひょうご県民連合」所属の議員等に擁立された候補でしたが、兵庫県政は長く共産を除くオール与党体制で、稲村氏も2008年以降は自民党県政を支える立場をとって来ました。そこで自民党県議らによる途中からの支援もむしろ歓迎されるほどでした。

NHKが投開票日の出口調査による斎藤氏への支持政党別の得票率を示していますが、これに直前に行なわれた総選挙での各党の得票数を掛け合わせると［表］のようなります（総選挙から知事選への投票率の2ポイント上昇は考慮しておらず、無党派層の総投

［表］斎藤氏の支持政党別得票数（予想）

A・支持政党別得票率	B・総選挙での各党の得票数	A×B（概数）
自民党の支持層の40%台半ば	53万票	23～24万票
日本維新の会の支持層の50%台半ば	45万票	24～25万票
国民民主党の支持層の60%余り	20万票	12万票
れいわ新選組の支持層の50%台半ば	15万票	8万票
無党派層の40%台後半	72万票	33～35万票
		計100～104万票

（注）支持政党別得票率についてのNHKの出口調査はhttps://www3.nhk.or.jp/lnews/kobe/20241117/2020027005.html

票数のみ知事選の総投票数から72万票として計算しています）。

合計は１００～１０４万票で、斎藤氏の得票実数１１１万票にかなり近いものとなっています。注目されるのは国民・維新・れいわの支持者が高い割合で斎藤氏の支持に向かっていること、また無党派の最多数が斎藤氏の支持に向かったことでしょう。他方で自民党支持層の40％台半ばを獲得している点については、'20年以上に渡って兵庫９区での当選を続け、裏金議員として党員資格停止中であるにもかかわらず、この総選挙でも当選した西村氏のもつ地盤が大きな役割を果たしたと思われます。

なお成蹊大学の伊藤昌亮氏は都知事選後に広まった「自民党やマスメディアまで含めて（左派も右派も）既得権益層と見なし、それに対する過激な異議申し立て」という動きは「欧米でいう『エキストリームセンター（極端な中道）』に近いかも」（「朝日新聞デジタル」２０２４年11月27日付（https://digital.asahi.com/articles/ASSCT1C5WSCTUPQJ007M.html?pn=8&unlock=1#continuehere）と指摘していますが、次に紹介するＳＮＳ・インターネット上に流布されたデマ情報の内容も考慮すれば、維新や国民、れいわの支持層にはそうした政治的志向との親和性が表れていると言えるかも知れません。

3 フェイク「ＳＮＳ劇場」に対抗できる力量を

斎藤知事への批判から支持へと世論の転換を推し進めた中心的な動力は斎藤氏の「好感度」を引上げる「ＳＮＳネット劇場」と、この選挙にビジネスチャンスを見て乱入したユーチューバー立花孝志氏等による「斎藤は既得権益勢力にはめられた」という架空の筋書きの大量発信と大量拡散でした。

孤立して１人だけから選挙に取り組んだ正義の斎藤氏が、次第に「真実に目覚めた」県民の支持を集め、最後には見事に知事に返り咲く。そういう「劇場」の立案と演出の中心に立ったのは「ＳＮＳやＷＥＢを活用したオンラインでのブランディングやマーケティングを軸に、プロデュースやプロモーションなどを手がけます」とするmerchu（メルチュ）でした。この会社の社長の折田楓氏は都知事選に立候補した石丸伸二氏の選対本部の一員で、斎藤氏には石丸選対の責任者だった藤川晋之助氏が支援を求められて紹介したとされる人物です。折田氏は選挙後に「（斎藤氏から）広

●兵庫県知事選挙に取り組んで

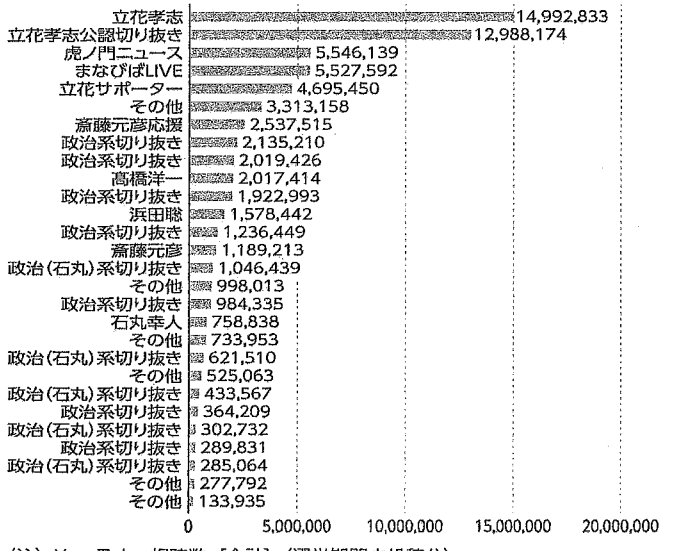
報全般を任せていただくことになり」、この「仕事」を「会社が手掛けたと」誇らしげにnoteに書き込んだ後、これを削除・修正し「無言」を貫いています。

また選挙中の街頭宣伝で斎藤氏の演説後、同じ場所に入れ違いに入り込み、同じ聴衆に斎藤氏への支持を訴えるなどの「2馬力選挙」を展開した立花氏によるユーチューブの再生数は、1500万回にも達しました。発信の内容は、新聞・テレビのオールドメディアは既得権益勢力、県議会や「百条委員会」も既得権益勢力、真実はSNS・ユーチューブにあるといった一方的な決めつけ、さらに斎藤氏を告発した後に自死に追い込まれた県職員を「10年で10人と不倫した」と根拠なく愚弄し、百条委員会委員長（自民党県議）の自宅前に宣伝カーで押しかけて怒声を浴びせるといった常軌を逸した行動などでした。

選挙中、これらの言動に対する新聞・テレビの批判やフェクトチェックはほとんど行なわれず、斎藤氏に折田氏を紹介した当の藤川氏が「（斎藤氏が）皆にいじめられてかわいそう」といった「印象だけで多くの票が動き、再生回数に応じて支払われる収益目的で虚偽や中傷を含む動画が拡散される恐れ」を語らずにおれないほどの状況でした。

現在この選挙の異常、不法・不当を告発する取り組みが様々な立場から行なわれていますが、リアルでもネットでも根拠のないフェイク情報を的確に批判し、これらを凌駕する量質ともに豊かな発信力と拡散力を身につけていくことが私たちに強く求められています。

［図］兵庫県知事選に関連するチャンネル別動画視聴数の合計



（注）You Tube 視聴数［合計］（選挙期間中投稿分）
資料：「ネットコミュニケーション研究所」レポートから「赤旗」作成（2024.12/4）